

Circular

理工サーキュラー



02

CST⁺なひと
NPO 法人情報ステーション
木村 圭佑さん

04

ソーシャルメディアで
つながろう

特集

06

つながる楽しさを
手に入れよう

08

僕はこの夏 鳥になった。
鳥人間コンテスト 2015

10

私の研究歴 133
学ぶべき道を見つけた喜び
そして、人との出会いへの感謝
交通システム工学科教授 藤井 敬宏

12

学生記者が行く！ 027

13

ZOOM UP !! CIRCLE
駿河台理科教育サークル/
弓道部

14 culture

15 announcement

16 event report

木村 圭佑



日本大学理工学部（CST）で過ごした学生時代を自分の力（+）にかえて、各界で活躍する卒業生にお話を伺う「CST+なひと」。

今回は、民間図書館や地域イベントの運営を通して船橋市を拠点にまちづくりに取り組むNPO法人情報ステーションの副代表、木村圭佑さん（海洋建築工学科卒）です。

海洋建築からWEBエンジニアへ

NPO法人情報ステーションが発足して12年目になります。発足当初、代表はまだ早稲田大学の学生で、JR船橋駅前に民間図書館を開設して地元の方々の交流の場になったり、地域情報を発信したりしていました。私は大学3年のときに地方情報誌でその記事を読み、「同年代の人が地元で面白いことをしている」と興味を持ち、図書館に行ってみました。その場でボランティア登録し、それ以来ずっと当NPOの活動にかかわってきました。ボランティアを始めた頃は、大学院に進もうと思っていたので就職活動をしていませんでした。就職活動をしないと結構時間があるので、ほとんど毎日通って図書館の窓口業務を行っていました。

自分のつくったものが形として残ることに魅力を感じて建築系の学科を志望したものの、いざ勉強してみると製図や模型づくりが大変で自分には向い

てないかも……と思っていました。大学院にも合格しましたが、建築物をつくるよりもっと早くもっと広く多くの人に使ってもらえるものをつくりたい、とモヤモヤしていました。世の中はITバブルで、サイバーエンジニアの藤田社長やライブドアの堀江社長が時代の寵児ともてはやされ、僕はそれにあこがれました。「将来は彼らのように起業しよう、それには建築ではなくWEBだ！」と考え、本格的に情報技術を身につけるために大学院には進学せず、学部を卒業後、デジタルハリウッド専門スクールで1年間プログラミングの基礎を学びました。

フリーエンジニア兼NPO副代表に

スクール卒業後、先生からの紹介でWEB制作会社に就職し、5年間勤めました。2年も過ぎると自分一人でプログラミングする技術はつきまです。でも僕はいずれ独立して起業しようと思っていたので、そのためにはマネジメントやお金の管理といった知識が必要になります。ですから社長に「事業部をひとつ任せてください」と直訴し、事業部長として裁量権を与えてもらいました。そこで売り上げ管理、採用人事など、独立するのに必要なすべてを経験しました。後輩も育ち、大きなプロジェクトが終わるタイミングで退職しました。

フリーランスのWEBエンジニアと

して働き方を変えたおかげで、NPOの活動に時間を割けるようになりまし
た。ちょうどそのころスタッフが一人
加入し、それまで専任スタッフがほぼ
代表一人だったのが活動体制が整い機
動力が上がったので、ここ3年で当N
POの図書館は30館ほど増え、現在は
50館にまでなりました。

僕たちが設置・運営する民間図書館
には「教育」「福祉」「経済」という3
つの目的があります。高齢者が家に閉
じこもらず少しでも外に出て人と話す
場をつくり健康を促進したい(福祉)、
そして外に出れば店で買い物をするだ
ろうから地元の経済活性化につなげた
い(経済)、また高齢者が図書館で若
い世代や子どもたちと交流し知恵や知
識を伝達してほしい(教育)。そのた
めには遠くの公立図書館にわざわざ行
くのではなく、歩いて数分のところに
気軽にに行ける図書館があると良い。そ

のために、民間図書館をたくさんつく
ろうとしています。

50館ある図書館の蔵書はすべて寄贈
本です。ボランティアの方と一緒に月
に1回、各館の蔵書を1割ずつ入れ替
えて、利用者に飽きられないようにし
ています。当NPOの図書館は、ほと
んどが既存の施設(老人ホーム、学童
保育等)や店舗に併設されています
が、図書館専用スペースのひとつ「船
橋北口みらい図書館」は、生涯学習イ
ベント「船橋みらい大学」の会場にも
利用しています。地元の方だけが講
師になって、自分の得意なことを教え
られる勉強会です。経験を積んだ年配
者が子どもたちや若い人たちに何かを
伝えられる場をつくりたい、と企画し
ました。子どもたちは親と学校の先生
以外、同年代の子どもたちとしか触れ
合う機会がないため、地元の大人たち
ともっと交流する機会をつくりたいと

考えたのです。

現状にとらわれない 周囲に流されない

僕は自分の進路を決める際に、立ち
止まって「自分は何がしたいんだろ
う?」と考えました。周りの友達のみ
んなゼネコンを目指して就職活動をし
ていました。僕も周りに流されて何と
なく進学や就職をしたりしていたら、
今とは全然違う人生だったろうと思
います。

自分のやりたいこともよくわからず
に「自分はこの学科だから」「給料が
良さそうだから」「大手だから」と何
となく就職先を選ぶのではなく、「自
分が輝ける場所はどこだろうか?」と考
えてほしいです。せつかく一度きりの
人生、無思考のままではもったいない。
周囲の声に流されたり、現状にとらわ

れたりせず、自分自身を見つめること
が大事だと思います。

きむら けいすけ

1984年	千葉県船橋市生まれ
2003年	理工学部海洋建築工学科入学
2006年	NPO法人情報ステーションに 参画
2007年	理工学部海洋建築工学科卒業 デジハリ Web エンジニア専攻 入学
2008年	卒業、アイレット株式会社入社
2010年	NPO法人情報ステーション 副代表
2013年	フリーランスエンジニアとして 独立

情報ステーション
www.infosta.org

学部長からのメッセージ

インターネットと ヒューマニティー



理工学部長
電子工学科教授
山本 寛

常日ごろから、多くの皆さん
はインターネットを活用してい
ると思います。タブレット端末
やスマートフォンが普及してか
らは、名実ともに指一本で世界

とつながり、情報を引き出すこ
とができるようになりました。
私が学生の頃は、情報源といえ
ば主に書籍でした。洋書を手
するのは金銭面でも流通面でも
難しい状況でしたので、図書館
に足しげく通っては活字を追
かけたものです。

インターネットは、1969
年にアメリカで誕生したARP
ANET、わが国では1984
年のJUNETが起源とされて
おり、いずれも大学や研究機関

の間を接続したことに端を発し
ています。その根底にあるのは
リソースの共有ですが、ARP
ANETの礎を築いたJ・C・R・
リックライダーも、JUNET
の創設者である村井純(慶應義
塾大学教授)も、「人的リソース」
あるいは「人と人とのつながり」
を中心に据えていたことは再確
認しておく必要があるでしょう。

今号のテーマは「ソーシヤル
メディアでつながろう」です。
皆さんもご存じのように、理工

学部でもFacebookをは
じめとするSNSによる情報発
信に取り組んでいます。学生・
教職員の活躍から日常の出来事
まで、これまでもさまざまなア
ピールをしてきました。もちろ
ん、その中心にあるのは、いず
なわちintelligence / initiative
/ identityにあふれた「人」の
姿です。また、社会で活躍す
る、22万人を超える理工学部の
校友とSNSでつながることで、
ヒューマンネットワークはさら

に広がり、深まり、力強いもの
となることでしょう。
インターネットは、人間関係
の間接化や単なる機械化を推し
進めるツールではなく、一人ひ
とりの「ヒューマニティー」を
高める画期的なツールです。有
効に、そして積極的に利用し
ながら、理工学部の次の100
年を担うCSTマインドを確か
なものにしていくってほしいと願
っています。

ソーシャルメディア でつながろう



1 ソーシャルメディアとは

ソーシャルメディアとは、インターネットを利用して誰でも手軽に情報を発信し、相互のやりとりができる双方向のメディアです。代表的なものとして、ブログ、FacebookやTwitter等のSNS（ソーシャルネットワークサービス）、YouTubeやニコニコ動画等の動画共有サイト、Line等のメッセージアプリがあります。ソーシャルメディアとSNSとを混同している人が多いかもしれませんが、ソーシャルメディアとSNS

Sはイコールではなく、ソーシャルメディアの種類のひとつとしてSNSがあります。

2 ソーシャルメディアの興隆

ソーシャルメディアには、多様な発信主体から閲覧者自身が必要とする情報源を選択したり、知人同士、同好の士などといった人間関係を利用して情報の流通を制御したりする仕組みが用意されています。2000年代以降、世界中へ普及し、インターネットの活用において重要な存在となりました。スマートフォン の普及は、生活の中で

ソーシャルメディアをいつでもどこでも利用可能にし、その活用の幅を広げています。

2010年から2011年にかけてアラブ世界で起きた民主化運動（アラブの春）では、ソーシャルメディア（SNSとくにFacebook）が大きな役割を果たしたと注目されました。また2011年3月の東日本大震災では、テレビ・ラジオなどの既存メディアに加えソーシャルメディアが情報伝達ツールとして活躍しました。ソーシャルメディアはこの震災を機に、情報伝達ツールとしての社会的ポジションを確立する一歩を踏み出しました。

ソーシャルメディアの種類とサービス例

種類	サービス例
ブログ	アメーバブログ/ココログ/Seesaa ブログ/ライブドアブログ
SNS (ソーシャルネットワークサービス)	Facebook / Twitter / mixi / Instagram / Google+
動画共有サイト	YouTube / ニコニコ動画 / ツイキャス / Vine
メッセージアプリ	LINE / WhatsApp / Viber / WeChat
情報共有サイト	価格コム / 食べログ / クックパッド
ソーシャルブックマーク	はてなブックマーク

3 SNSの特性と注意点

最近、SNSでの不用意な投稿が原因で投稿者本人が非難にさらされたり、消費者の投稿を契機として企業が予期せぬ非難にさらされたりする、いわゆる「炎上」が注目されています。ネット上の書き込みが原因で、個人や企業がトラブルに巻き込まれる現象自体はインターネット黎明期からありましたが、このようにSNSでの「炎上」が最近とくに注目されるようになった背景には、TwitterやFacebookなどのSNSが持つ機能の特



SNSによる情報の「共有」と「拡散」

友人同士で情報を「共有」しやすい一方、一度発信された情報は相乗的に「拡散」されるため、取り消しや回収が不可能になります。

性があります。SNSでは、自分が入った他人の投稿を知人と簡単に共有し連鎖的に投稿の共有が行われるため、投稿がまたたく間に広範囲へと拡散していくという特徴があるのです。

SNSの投稿には公開範囲を設定することができません。しかし、公開範囲をよく確認しないまま利用する人も多く、知人同士のプライベートな発言がネット上に広がってしまうこともあります。元の投稿を削除してもネット上では残ってしまうことも多く、取り返しがつきません。仲間内のつもりで反社会的な行為を自慢したために、所属先から処分を受けるといった事例もあります。

SNSは人的ネットワークが広がる場でもあります。日常生活での知人とSNSでの知人が重なった結果、投稿を無視できない、返事をしなければならぬ、という気持ちに疲れてしまうこともあります。場合によっては、

こんな人にオススメ!のSNS

SNSにはそれぞれ異なる個性があります。どんな目的でのSNSを選ぶかによって猛烈に楽しめる場合もあれば、ストレスにしかならない場合もあります。自分の好みや目的に合ったSNSを選ぶことが大切です。自分の周囲がどのSNSをどんなふうに使っているかを知るのも、自分に合ったSNSを探すのに役立ちます。大規模なSNS以外にも、趣味や地域、年代などに特化した、比較的小規模なSNSもあります。試しに「○○○(自分の趣味や興味のあるキーワード) SNS」で検索してみてください。「こんなSNSがあるんだ!」「これなら参加してみたい!」と興味がわくかもしれません。

リアルな友人・知人と交流したい人に **Facebook**

【特徴】・実名でつながる世界最大のSNS
・いいね!・コメント・シェアで友達と交流
・文章・写真・リンク・動画など、さまざまな投稿オプション

短文で表現したい人や交流したい人に **Twitter**

【特徴】・実名登録しなくても良いオープンなSNS
・ツイートはネット上に公開
・テレビ番組の実況に最適
・ハッシュタグ・リツイートによる高い拡散力

同じ趣味を持つ人と会いたい人に **mixi**

【特徴】・実名登録の必要がなく新しいつながりを見つけやすいSNS
・コミュニティ機能が充実、同じ趣味の人を見つけやすい
・アプリゲームが充実

撮った写真を発表したい、写真で交流したい人に **Instagram**

【特徴】・写真や動画を加工し、他のSNSと連携してアップロードもできるSNS
・フィルターがけやコントラスト調整で、簡単に素敵な写真にできる

いろんな人とつながりたいけど、匿名性が高すぎるのには抵抗がある人に **Google+**

【特徴】・Googleが提供する世界第2位の規模のSNS
・見せたい人だけに投稿が共有できる
・友達申請なしでユーザーをフォローできる
・最大10人とビデオチャットができる

4 災害時にも活躍するソーシャルメディア

SNS上での言い争いがきつくなって、日常生活でのトラブルに発展することもあります。SNSはソーシャルメディアの中でもよりコミュニケーション要素が強いのが特徴です。人と人とのつながりを重視するSNSだからからこそ、利用の際には注意したいものです。

東日本大震災を機に、ソーシャルメディアは地震、豪雨、大雪等の災害時など、不測の事態における連絡手段や情報収集手段として認知されてきました。震災直後の災害情報伝達のほかにも、安否情報確認、物品支援、ボランティア活動、募金活動、

再興企業への支援などの被災地支援が、ソーシャルメディアを介して積極的に行われています。

災害時には、日本大学や理工学部が発信する緊急ニュースも、公式ホームページに掲載された情報がFacebookやTwitterに転載されるようになっていきます。

とはいえ災害規模が大きくなればなるほど、Twitterなどに流れる情報は膨大になります。情報の正確さを検証し判断できる力がないと、二次災害に巻き込まれたり、間違った情報を拡散したりしてしまう可能性もあります。災害時にソーシャルメディアを効果的に活用するためには、平時からそのルールやマナーを意識して日常的な活用に努めることが大事です。

5 リアルにつながる手段として

いろいろな人と知り合える、ゲームができる、映像が見られる、音楽が聴ける、調べ物ができる、自己表現ができる……ソーシャルメディアを始めるきっかけや楽しみ方はさまざまです。でも、大事なのはネットの中で楽しみを完結するのではなく、ソーシャルメディアをきっかけにして実際に人につたり、興味を持った場所に行ったり、実体験すること。思わぬ人につながれて自分の思いを叶えたり、夢を実現できたり。自己実現や実生活をプラットフォームを活用してください。

つながる楽しさを手に入れよう

理工学部広報委員長
交通システム工学科教授
轟 朝幸

理工学部公式Facebook でつながる

日本大学理工学部は2015年1月から公式Facebookの運用を始めました。以前から理工学部のホームページにはニュース欄があり、ニュース性のある告知や報告(教員・学生の受賞やイベント情報など)を載せていましたが、普段のキャンパスの様子や、こんな授業をしていますなど、理工学部の日常を広く知ってもらいたかったのです。

ターゲットは受験生、在学生、卒業生、教職員と幅広いです。学部内のことなぜか在校生や教職員に?と思われるかもしれませんが、理工学部には学科が14もあり他学科で何をしているか、学生や教職員は意外と知りません。学科独自の授業、イベント、合宿(研修旅行)等もありますから、その情報を共有して他学科の人同士の会話の糸口になれば良いですし、もっと理工学部としての一体感を醸成したいという目的もありました。

在学生の保護者が見て、大学内でどんなことをしているのかを知ることができてとても安心すると言っていただ

くこともあります。が、もつともよく反応してくださるのが卒業生で、コメントをたくさんいただきます。理工学部には95年の歴史があり卒業生は22万人です。たくさん卒業生がFacebookをフォローしてくれたり、記事シェアしてくれたり、「いいね!」を押してくれたりすれば、おのずと理工学部の広報になるのではないかと運用当初から期待していましたが、その期待以上の熱い反応です。

在学生も、卒業生も、一緒に 理工学部を盛り上げたい

Facebookはできるだけ頻繁に、例えば「桜が咲いています」「富士山が見えました」などキャンパス内のちょっとした気づきをアップするようになっています。Facebookチームの投稿には「Facebookチームです」、それ以外は所属学科と名前を記載して、投稿者の顔が見えるように心がけています。Facebookに掲載されたことがきっかけでテレビ局から取材依頼をいただくこともあります。理工学部の教員は割と頻繁にテレビ出演していますから、その告知もします。これまでは知らないうちにテレビ出演



目指せ、1万「いいね!」キャンペーン中。

して、学生もほかの教員も見えていなかったというもったいないことが多かったのです。

最近ではやはり、鳥人間コンテストが卒業生を中心にもすごく盛り上がりました。ただ、学生からの反応が意外に少なかったです。もっと積極的に参加して、一緒に盛り上がってほしいです。みんなで応援して、みんなで喜んで、みんなで泣いてほしい。Facebookはそういった雰囲気をつくることができるツールだと思っています。逆に、例えばサークルで大会に出場するときなどは「応援してください」とアピールしてほしい。終わったあとは「来年もがんばります」という結果報告もしてほしい。学生の活躍や活動報告は積極的に載せたいと思っています。

リアルなつながりを大切に

ソーシャルメディアの一番のプラス要素は、人とつながること。理工学部Facebookを始めたことによつて、たくさん卒業生とつながることができました。在学中の学生は目の届くところにいますが、卒業してしまうとどうしているのかわからなくなります。Facebookによつて卒業生にも大学のことを知ってもらえ、われわれも卒業生がいまどこにいて何をしているのか知ることが出来ます。日本にいる人だけではなく、海外にいる人ともつながることが出来ます。とくに距離が遠ければ遠いほど、つながる意義を感じます。

ここ数十年、情報化が進んで顕著に

**日本大学理工学部
Facebook
『いいね!』獲得ベスト5**

2015年1月1日～9月30日調べ
シェア先での『いいね!』を含みます

**2位
239
いいね!**



**1位
263
いいね!**



**5位
175
いいね!**



**4位
205
いいね!**



**3位
226
いいね!**



- ① 9/11 【航空宇宙工学科】グライダーの曳航実験
- ② 1/27 【新校舎建設に向けて】
- ③ 9/21 【日大理工サイエンスガール×撮影】
- ④ 3/25 【学位記伝達式】
- ⑤ 5/12 【船橋キャンパス】台風一過のキャンパス

将来につなげる

ソーシャルメディアは楽しく情報収集できるツールでもあり、手軽に情報発信し自分をアピールできるツールでもあります。例えば、自分の興味のあることや勉強している分野に関する団体・個人のFacebookをフォローすることで、手軽に有益な情報収集ができます。3年生になってから就職活動のひとつとして始めるのではなく、低学年のうちから始めることで自分の勉強にもなりますし、業界研究や企業研究の第一歩にもなります。上手に継続していけば、自分の大学生活を一覧できるポートフォリオになります。ソーシャルメディアを積極的に活用して、将来の自分につなげてください。

ソーシャルメディア利用にあたって

ソーシャルメディア利用のガイドライン

日本大学理工学部は、学生の個人的、私的なソーシャルメディアの利用に関してガイドラインを制定しています。

このガイドラインには「表現の自由」「法令等の遵守」「正確な情報」「発言の責任」「守秘義務・秘密情報の取扱」等についての注意点が記載してあります。よく読んで上でソーシャルメディアを積極的に利用し、有意義な学生生活に活用してください。

日本大学理工学部ソーシャルメディア・ポリシー

「学生のソーシャルメディア利用のガイドライン」
<http://www.cst.nihon-u.ac.jp/news/2015/07/28001257.html>

ソーシャルメディアでの誹謗中傷や嫌がらせに悩んだら、ここに相談!

ソーシャルメディアの投稿には、読む人の気持ちを考える思いやりが大事です。読む人の立場になって投稿前に読み返してみましょう。もしブログやSNSなどでの悪口や嫌がらせにあったら、「はずかしい」「仕返し怖い」と

思わずに友人や先生、家族など信頼できる人に相談してください。日本大学では理工学部、大学本部で相談体制を整えています。

理工学部学生課

- ・駿河台校舎 1号館1階 03-3259-0608
- ・船橋校舎 14号館1階 047-469-5522

理工学部学生相談室

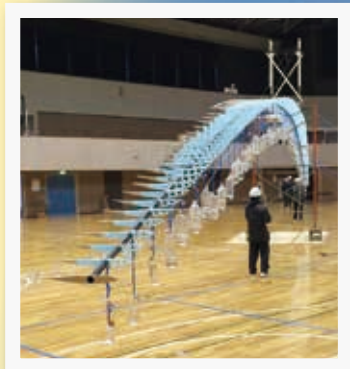
- ・駿河台校舎 5号館2階 03-3259-0611
- ・船橋校舎 14号館1階 047-469-5296

日本大学人権相談オフィス

- 日本大学会館第二別館3階 03-3221-2562
- jinken@nihon-u.ac.jp

僕はこの夏 鳥になった。

鳥人間コンテスト2015
22km 超えのビッグフライト!!



理工学部航空研究会と 鳥人間コンテスト

鳥人間コンテストは1977年に第1回が開催された歴史がある大会で、現在は「滑空機」「人カプロペラ機タイムトライアル」「人カプロペラ機ディスタンス」の3部門で競技が実施されています。理工学部航空研究会は、人カプロペラ機ディスタンス部門で最多出場・最多優勝を誇る名門です。この部門は、琵琶湖畔のスタート地点から半径20km先で折り返してスタート地点へ戻る40km内で飛行距離を競う競技です。

理工学部航空研究会は、理工学部航空宇宙工学科の基盤を確立された故・木村秀政先生が、授業の一環で軽飛行機開発を取り上げたことに始まります。人力による日本初飛行や国内最長記録を樹立するなどの大きな足跡を残し、「ものづくり」の精神、共同作業の規律や強調性などの伝統が今日まで引き継がれています。毎年1機の人カ飛行機を完成させるため3年生をリーダーとした作業班を編成し、1年間かけて機体製作に取り組み、下級生は上級生のもとで実作業の経験を積み重ねていきます。

Möwe32 の特徴

平成27年度は、3年生10人、2年生10人が、

翼やプロペラ、胴体など6班に分かれ、休日返上で連日22時近くまで作業を行いました。各班の進捗状況を毎日のミーティングで共有して、常に全体工程を管理しながらすべての運営を学生のみで行い、メンバー全員がひとつの目標「10年ぶり10度目の総合優勝」に向かって活動してきました。Möwe32は前年までの設計の長所を踏襲しながら、「効率よく20km飛行する」という目標を果たすべく、さらなる改善を加えました。

2014年大会で棄権を余儀無くさせられた強風。琵琶湖の上空は風速、風向が目まぐるしく変化します。多方向からの不安定な風に対応でき無駄のない直線飛行に必要な不可欠な「安定性」と、20km先での旋回を考慮した「操縦性能」を両立させ、最大限の効率化を図りました。これは本番で十分な成果として現れました。

また、新たな試みとして33mの主翼を5分割から11分割にし、さらに、通常は約8.5m1本のフレームを3分割に変更することで輸送用トラックを従来の10tから2tで済むようにしました。車両とドライバーの確保が容易になり、輸送コストの大幅削減で遠征費用を捻出した結果、学内ではかなわなかった長距離試験飛行ができるようになりました。

人力飛行機の機体は、パイロットの体格と身体能力を計測し、その結果に基づいて設計します。設計時の設定を下回るパフォーマンスは許されないため、パイロットは



平成27年度2、3年生



ロードバイクやトレーニングマシンによる訓練を続けます。新年度からは1年生20人も加わり、総勢40名で基本的な機体調整や操縦訓練をした後、長い滑走路を求めてふくしまスカイパークまで遠征し、パイロットの操縦技術をはじめ、機体調整に必要な詳細データを得ました。試験飛行を繰り返すことで、機体の完成度・チームの安全への意識が高まりました。試験飛行にはいつも、温かく見守ってくれる先輩方の姿がありました。

いざテイクオフ!

鳥人間コンテストに向けて、3年生のパイロットは次年のパイロットと共に1週間前に現地入りし、本番に向けて調整します。一方、チーム本体は機体と共に本番前日に現地に到着し、その日のうちに主催者による機体チェックを受けるため、琵琶湖畔の駐機場で組み立て、審査後にいったん分解します。月夜の湖畔で皆が交代で機体各部を手で支え続け、深夜2時を過ぎてから最終組み立てを行いました。

明けて7月26日午前7時、晴天・微風の中、全員の努力の結晶 Mōwe32 は機体構造製作を取りまとめた浅野雄也(3年)の指揮のもと、湖面から高さ10mのスタート地点まで慎重に運び上げられ、西方向にセット。プラットホーム上で皆が発進前の最終確認を行う中、コックピットに入りました。湖上のボートには、設計担当の上田裕貴(3年)が待機しています。

左後ろからやや強めの風を受けていましたが、意を決し右翼・左翼・テールを支える仲間最終コールを発すると、力強く「OK!」の返事。「3、2、1、GO!」皆の渾身の力で押し出され、一瞬の下降を感じた後、心地良い浮揚感。プラットホームの凄まじい興奮が後方に消え去り、機体をすり抜ける風の音だけになりました。

鳥になった60分間

フライトが始まると、プラン通りに飛ぶことだけを考えました。進路を多景島の北側にとり、序盤の5kmを高速で通過。スタート地点から5kmの不安定な気流の状態は、ボートによる事前視察で把握していました。先行チームが克服できなかった気流の中を通過している間、コックピットは無回転ボールのような不規則で小刻みな振動が発生し、機体をコントロールするのに



機体をコントロールしながら飛行

精いっぱいでした。

あっという間に20分が経過。ポートで並走する上田と相談して、スタート地点から南方向20kmでの折り返しを目指すことを選択。12kmに差し掛かると波が立っているとの報告、これは風が乱れているというサインです。急にペダルが重くなり、左足が痛み始め、保っていた高度は不安定な上下運動を繰り返します。徐々に下がりながら14km過ぎで高度2m程度に安定しましたが、この間にかなりの体力を消耗しました。

低空飛行を続けて何とか19kmまで。あと1kmがとても長く感じられました。1年間目指してきた20kmが視野に入り気持ちが高まるものの、冷静に考えると旋回するには高度が低すぎました。一般的には、旋回中に高度が3~5m落ちるといわれているため、油断できません。20km到達を知らせるホーンに続いて、上田の「左旋回!!」という声が聞こえました。旋回は事前に飛行練習ができないので、一発勝負。回転数を上げて細かな舵を打ちながら緩やかに旋回を続けるうちに、視界には多景島と太陽の光が飛び込んできました。「完璧に回りきった!」最高にうれしい瞬間でした。

進路変更後しばらくすると、不意に水切り音が聞こえました。旋回で風向きが反転したため、追い風に乗り切れずに高度が下がってしまったのです。着水を回避するためにフルスロットルでプロペラを回した瞬間、左右の臀部、裏腿、ふくらはぎの6カ所すべての筋肉がつかまりました。何とか機体を引き上げたもの

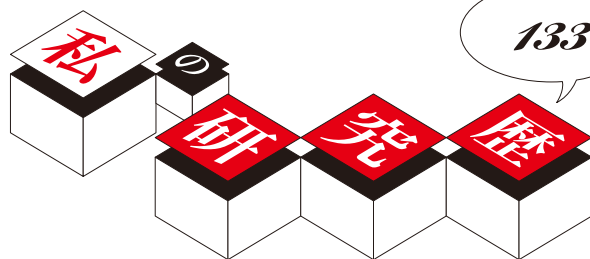


の回転数が思うように上がりません。激痛を耐えながら力を振り絞って回転数を高め、細かく舵を切り続けましたが、何度も水を切るのを感じ、とうとう機体は滑るように静かに着水してしまいました。

夢を形に

飛行距離22,892m、飛行時間60分。優勝こそ逃しましたが、総合順位2位に加え審査員特別賞まで受賞しました。僕たちはこの記録よりも、1年間かけて製作した飛行機、活動が審査員を務める専門家に認められたことが何よりもうれしく、誇りに思います。そしてその素晴らしい飛行機をつくってくれた仲間、いつもそばで支えてくださった方々に心から感謝しています。

Mōwe32パイロット 宇佐美 皓平
(航空宇宙工学科3年)



交通システム工学科教授 藤井敬宏

学ぶべき道を見つけた喜び そして、人との出会いへの感謝



学ぶべき道を決めた瞬間

私は高校時代、父親と同じ数学の高校教師になろうと思っていました。なのに大学は交通工学科。

入学後、この学科で継続して学ぶべきなのか、他大学を再受験して教師を目指すべきなのか、半年間悩みました。物心ついた頃から高校生まで、母親を介してしか会話をしてくれなかった父が、夏休みに北海道へ帰省した際、「生徒から学生になつたんだ。お前の話をこれからは直接聞くことにしよう」と話しかけてくれました。対等とは言えませんが、社会に

巣立つべく歩みだした一人の人格として認めてくれた証しなのかなと、そして、教えを請うこれまでの意識を、自ら学ぶという意識に変えなければいけないんだと、強く感じた瞬間でした。父は私の悩みに対し、「新しい時代を築くこと、新たな分野にチャレンジすることは、若者の特権であり責務だ。好きな数学を社会に役立てるツールとして活用するのも、悪いことじゃない」と話してくれまし

た。さらに教師になつた経緯と、これもこの時初めて聞きましたが「日立製作所の研究所でディーゼル機関車の開発に携わっていた時、父親が急逝。長男として幼い5人の弟妹を育てるために地元で教師をせざるを得なかった。息子には、技術者の道を目指してほしかった」という思いを知りました。父と初めて交わした面と向かつた会話が、交通工学の分野にかけてみようという心を決めた瞬間となりました。

研究の面白さを学んだ師との出会い

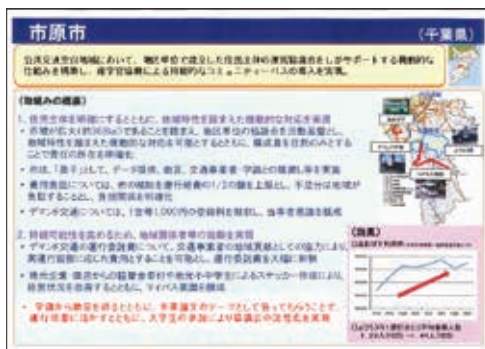
大学では、将来の方向性を決定的にする先生との出会い。それが、高田邦道名誉教授(当時専任講師)でした。

2年生の夏、地方父母懇談会の札幌会場に母が出席し、高田先生と面談したことから始まりました。交通工学の分野を学ぶと決め、科目履修に真剣に取り組んだことが高成績に繋がったのか、先生から「交通技術者を目指し大学院に進学するように」とのお話がありました。母は、交通工学を学ぶために大学院に行き

たいと話しておりましたので、その思いを先生にお伝えしたところ「それでは、後期から研究室に來させなさい」と言われました。当時、ゼミナールの配属は3年生の後期からでしたが、1年前から門前の小僧のように研究室に席を借り、打ち合わせや勉強会に参加、交通工学を学ぶ生活がスタートしました。

研究者の道へのスタートライン

大学院での研究テーマは、「幹線道路のアクセスコントロールによる影響評価」でした。大学院の審査権の関係で、当時飛鳥建設の副社長をされていた吉田喜市先生にもご指導をいただきました。沿道志向型施設の立地規制や、道路の段階性を考慮したアクセスコントロールによる沿道土地利用評価を行いました。今ではエクセルで1秒もかからず答えが出てしましますが、フォートラン言語を用い、穿孔機で1枚ずつプログラムを作成し、コンピュータを冷却するために風と音が舞う中に泊まり込んで答えが出る、それをひたすら繰り返す状況でした。



2015年7月、卒業研究のテーマとして取り組んだ官学民共同による千葉県市原市の公共交通政策が、地域公共交通優良団体国土交通大臣表彰を受ける。

- 1957年6月 北海道上川郡美瑛町生まれ
- 1976年3月 北海道滝川高等学校卒業
- 1980年3月 日本大学理工学部交通工学科卒業
- 1982年3月 日本大学大学院理工学研究科博士前期課程交通土木工学専攻修了
- 1982年4月 日本大学理工学部交通土木工学科助手
- 1884年4月 同助手
- 1992年10月 博士(工学)(日本大学)
- 1993年4月 同専任講師
- 1993年4月 (財)国土開発技術研究センター 参事(本学部特別研究員として95年3月まで)
- 2003年4月 日本大学理工学部社会交通工学科助教授
- 2006年4月 同教授(現在、交通システム工学科教授)



1996年、専任講師として初めて指導した大学院生。二人との出会いから、何を伝えられるかがスタート。

大学院を修了して研究室に残ることに
なったのも、高田先生からの一言でし
た。交通技術者として活躍したいとい
う思いから、交通コンサルタントの面接に
進む段で「技術者になるのであれば、ま
ずは助手となり、学位を取得し、自己を
磨きなさい」と言われ、そういう道もあ
るとその場でお世話になることを決めま
した。

その際、先生からは「私と同じ物的流
通計画や、駐車計画等の分野は研究す
るな。決して私を超えることはできない。
君の特徴である得意な数学を活かして、
私と違う観点から交通分野に取り組みな
さい。そして、学科で、社会で必要とさ
れる教育者・研究者になりなさい」と進
むべき道標までご教示いただきました。
その時から、地域固有の交通問題を解
きほぐすことを目指し、「現地に向き」
「地域の声を聴き」、「歴史・風土・慣習を
調べ」、「意見交換を行う」、そんな研究に
取り組みたいと思うようになりました。
それが、地域公共交通の改善策の検討等
のフィールドワークに取り組みきつかけ
となつていきます。

研究の厳しさを学んだ師との出会い

助手時代、高田先生の博士論文の審査
をなされた京都大学の長尾義三教授が学
科教授としてご就任。そして、長尾先生
の助手として交通計画第二研究室から河
海工学研究室へ配置換え。先生の下で、
「総合評価」「港湾計画」「環境評価」等
を学び、「環境に配慮した沿岸域のゾー
ニング」の博士論文に着手。当時、闘争

が続いていた成田空港の適正化に向け、
円卓会議を手掛けるなどお忙しい中、マ
ンツーマンの赤ペン指導は、博士論文の
科内専攻会の前日に当たる手術を翌日に
控えたベッドの上まで続き、「後は君し
だい。やるだけ」と手術への不安を微塵
も見せない笑顔で「腹をくくれ」と伝え
られました。研究者として妥協を許さぬ
強さと厳しさを教えられました。

実学を学ぶ、研究活動を越えた出会い

1993(平成5)年、専任講師への
昇格と共に(財)国土開発技術研究セン
ター(現、(財)国土技術研究センター)
に2年間出向。いきなり年間総額1億円
超の研究費を預かり、「羽田空港の供用
開始に伴う湾岸道路の影響評価」「大和
町交差点の環境保全対策」等を担当、「道
路構造令の改定業務」等にも参加し、国
が進めるインフラ整備や今後の施策検討
事業等に携わり、多くの方との出会いが
ありました。

センターでは、就任早々「〇〇国道の
『ゲンセツ(現場説明会)』に行つてほし
い」、そして意味も分からぬまま担当者
から「今回は〇〇〇〇円位の随契(随意契
約)で」との情報を持ち帰る。教育・研
究の場とかけ離れた、「業務」「社会」を
強く意識した瞬間でもありました。

センターの経験は、コンサルタント技
術者を目指していた私にとってすべてが
新鮮で、実学を学べた2年間でした。

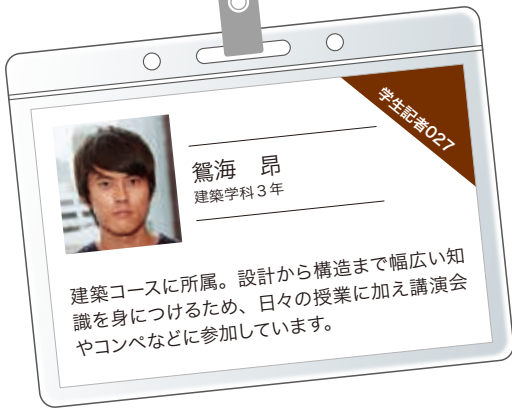
何を伝えられるか(社会に貢献する喜び)

1995(平成7)年より、大学に戻

り新たな教育・研究活動をスタート。指
導する大学院生に何を伝えられるか。私
には、「先生方と同じような指導力も影
響力もない。では何ができるか。私自身
が研究を楽しむ姿を見せることしかでき
ない。ならば、そうすべき」と研究を通
じて社会に貢献する喜びを学生時代から
享受できるように、そんなフィールドワ
ークの研究を行うことにしました。

千葉県市原市での取り組みでは、佐久
間元市長へ、企画部の中に交通政策課を
設立してもらうことからスタート。そし
て、市担当者と大学院生らと協働で市原
市総合交通計画を作成。その計画に基づ
いて、コミュニティバスやデマンドタク
シー等の公共交通支援策を展開すべき地
域を検討し、官学民共同による運営協議
会を設立。この協議会が卒業論文や修士
論文の研究フィールド。この取り組みで
本年7月、国土交通大臣から地域公共交
通優良団体表彰を市原市が受賞。交通空
白・不便地域において、地区単位で設立
した住民主体の協議会をサポートする体
制を構築し、協働による持続可能な地域
公共交通の導入と、その維持確保に取り
組んだことが評価されたもので、図に記
されているように、参加した学生らが協
議会の活性化を実現させたことが大きな
要因となつていきます。

私はこれからも、多くの方々との出会
いに感謝しながら、学生自身が交通工学
のフィールドで社会貢献できる喜びを享
受できるように、そんな研究活動を継続
していきたいと考えています。



第47回建築学生海外研修旅行

(Aコース)

2015年8月4日-25日



ビルバオ・グッゲンハイム美術館 (フランク・O・ゲイリー, 1997)

この夏、私は建築学科が企画する海外研修旅行に参加しました。この研修旅行は、建築学科教員同行のもと、諸外国の都市と建築、そして風土や人々の生活に直に接することによって、教室では得られない体験をすることを目的としています。私が参加したAコースは、近代建築を生んだ鉄・ガラス・コンクリート建築の起源への旅ということで、イギリス、フランス、スペイン、イタリアの欧州4カ国を22日間で巡りながら、建築のデザインや構造・構法などを考えるという研修でした。一方、Bコースは世界遺産の都市と建築を中心に、クロアチ

ア、イタリア、ドイツ、フランスと欧州で世界遺産に登録された都市・建築を21日間で巡りながら、ユネスコに評価された各都市、各建築を自身の目であらためてとらえ直し、都市的な課題・建築的な対応を考えるという研修でした。Aコースは学生34名と教員2名、Bコースは学生27名と教員2名の計65名が今回の海外研修旅行に参加しました。

Aコースでまず訪れたのは、産業革命が最初に起きた地であるイギリスです。ロンドンとその近郊を中心に、アイアンブリッジ(1779年)、パーミンガム図書館(2013年)、ケンブリッジ大学、リノベーション作品のテート・モダン(2000年改修)などを訪れました。次にパリではオルセー美術館(1986年改修)、ポンピドゥー・センター(1977年)、ル・コルビュジエのサヴォア邸(1931年)、エッフェル塔(1889年)などを訪れました。スペインでは、ビルバオ・グッゲンハイム美術館(1997年)、サグラダ・ファミリアをはじめとするガウディ建築、ミース・ファン・デル・ローエのバルセロナ・パビリオン(1929年再築)など

を訪れました。その後、再びフランスに戻りル・コルビュジエのユニテ・ダビタシオン(1952年)に宿泊し、最後にイタリアを訪れ、フィレンツェの大聖堂(1461年)やローマのコロッセオ(81年)、パンテオン(125年)などを訪れました。このように、近・現代建築から古代建築まで幅広い建築を見て回りました。

今回この研修旅行に参加したことで、多くを学ぶことができました。そして、仲間とともに短期間に多くの建築を見たことに大きな意義があったと考えています。設計・計画学的な面や構造的な面といったいろいろな観点で建築を見ることで、建築という大きなものを細分化しながらひとつひとつ学び、それらを議論したり、前日に見た建築と関連させたりすることで、より理解を深めることができました。また、いろいろな観点で学んだことにより、建築におけるさまざまな分野がどのように実際の建築に反映されているかがわかるようになり、これからの進路だけではなく、どのように建築を学んでいくべきかを考える良い機会になりました。



バルセロナ・パビリオンにて



アイアンブリッジ (エイブラハム・ダービー, トーマス・プリチャード, 1779)



サヴォア邸 (ル・コルビュジエ, 1931)

File no. 55



駿河台理科教育サークル

駿河台理科教育サークルは物理学の教員・学生がボランティアで行っていた理科教育に関する活動をベースに、3年前に学生主体のサークルとして発足しました。付属校と連携して、高校生が物理学3年生の「物理学実験」を受講するのをサポートしたり、高校生と一緒に実験プロジェクトを行ったり、科学イベントに参加して小学生に理科の楽しさを教えたりしています。

今年の8月に理工学部で行われた「小学生のための夏休み自由研究教室」では、日本大学習志野高等学校と一緒に、

大気圧に関する実験を小学生に教えました。子どもたちが簡単につくって実験できるキット（ペットボトル気圧計）を考案して、その場の実験だけで終わらず家に持ち帰って表をまとめ、実際に自由研究として学校に提出できるよう工夫しました。

実験キットは毎回、ゼロから自分たちで考え試作を繰り返します。みんなと意見を出し合いながらどうすればうまくか、またどうすれば子どもたちが楽しみながら学んでくれるのかを試行錯誤しています。



いまは、12月と3月に新宿未来創造財団が主催する「子ども未来講座」と「レガスサイエンスフェスタ」へ向け、小学生のための理科実験の企画を考えているところです。

サークルでの経験を教職課程、学芸員課程での学びに生かすこともできます。現在は物理学の学生がほとんどですが、他学科の学生にも入ってもらい、活動の幅を広げていきたいと考えています。

File no. 56

弓道部



日本大学工科弓道部は、生産工学部実習校舎の弓道場で週3日練習を行っています。42年の伝統があり、5年に一度は盛大なパーティーを開いて卒業生と在学生が一堂に会します。部の組織はしっかりしていて、練習以外にも一人ひとりに割り振られた仕事とおして部に深くかかわれるようにしていますし、挨拶や礼儀はしっかりと身につきます。

部員40名ほどで、そのうち理工学部が7名、あとは生産工学部です。昨年の関東学生弓道選手権大会（中関東プロッ

クリーグ戦）男子Ⅱ部で優勝し、入れ替え戦で勝ったので、今年は男子Ⅰ部での優勝を目指して戦っています。ちなみに



女子はⅢ部に所属しています。

部員の半分以上が弓道の経験者ですが、まったくの初心者から始めても1年ほどで戦えるようになります。基本的な形が決まっているので、自分の頭で理解してその形に近づけていくこと。弓道は対人競技ではなく自分との闘いですし、明確なゴールはありません。そこが魅力です。自分が頑張る自分に勝つことで自信がつき、強くなっていきます。動きは一見単純で、弓を引っ張って離すだけです。だからこそとても繊細で、その日の体調や感覚の違い、精神的なものからでも中率が変わります。大事なのはとにかく続けること。つらくても続けることで克服できるものがあり、できなかったことができるようになります。

弓道が続けると精神面が鍛えられ集中力がつきます。一点への集中力、そして人前でも緊張感を持ちながら頭を冷静に働かせる力は、勉強や日常生活に生かすことができると思います。

BOOK

『先生、物理っておもしろいんですか?』

パリティ編集委員会 編/丸善出版

この本は、物理学の世界で活躍されている先生方 69 人が「高校生や大学 1 年生に『物理っておもしろいんですか?』と聞かれた場面を想像して」書かれたコラムの総集編です。

それぞれが違う分野・視点から「おもしろさ」を語っています。幼い頃から星を見るのが好き、物を分解するのが好きという人から、大学に入ってから魅せられてという人もいます。

物理に限らず、人生の長い時間をとおして「おもしろい」ことに携わることができたら、幸せなことなのだと思います。大学にはそういった「おもしろい」ことがたくさんあると思いますよ。

(一般教育物理系列助教 岡田 悟志)



BOOK



『容疑者Xの献身』

東野 圭吾 著/文春文庫

皆さんは、天才物理学者と数学者が戦ったら、どちらが勝つと思いますか？この作品では、ミステリーという形でこの二人の熱い戦いを楽しむことができます。二人の関係が大学時代の同期で顔見知りということもあり、単純に戦いを楽しむだけではなく、お互いの心理を考えながら一緒に考えていける濃厚な仕上がりになっています。自身をどれだけ人のために尽くすことができるかの極限のような作品で、とても感情を動かされる物語です。

後悔はさせません。ぜひこの作品を読んでみてください!!

(博士前期課程電子工学専攻 2 年 林 佑太郎)

MOVIE

『トランセンデンス』

近年の人工知能の発達はめまぐるしいもので、皆さんのもっとも身近なところだと iPhone の Siri があげられるかと思っています。

この映画は、人工知能学者の脳のコピーがスーパーコンピュータに「インストール」されることにより、コンピュータが人を支配する未来を描いた作品です。あまりにも遠い未来のように思えますが、コンピュータの性能が現在よりもはるかに向上しさえすれば実現可能だと思います。

人工知能が人間の仕事をすべて肩代わりできる世の中がきてしまったら、私たちには何が残り、私たちはどう生きていくべきなのか。そんな現代に訴えかけるような作品です。(電気工学科 4 年 椋代 真鈴)



「トランセンデンス」発売中
 発売元：ポニーキャニオン
 価格：DVD 3,800円(本体 3,000円)
 ブルレイ 4,700円(本体 4,000円)
 ©2014 Aicon Entertainment, LLC
 All Rights Reserved.

**就職指導課・キャリア支援センター
後期おすすめイベント**

【12月】

業界セミナー

対象：平成29年3月卒業・修了見込みの
就職希望者を中心とした全学生

開催：駿河台校舎

12月7日・8日・9日・10日・14日・
15日・16日

企業の人事担当者や日大OB・OGが理工学部生に直接、業界の説明・動向、仕事の内容を話しに来る教室講義形式のセミナーです。就活に向けた経験値が一気に上がる、またとない機会です。

【平成28年2月】

学内セミナー

対象：平成29年3月卒業・修了見込みの
就職希望者を中心とした全学生

開催：駿河台校舎 2月8日・9日

船橋校舎 2月12日

ブース形式の学内セミナーです。

各企業・公務員等団体の担当者および日大OB・OGにご出席いただき、事業内容や職種別にどのような人材が活躍しているかなどを、具体的に説明します。約180社が来校予定です。

このほかにも、履歴書・エントリーシート、業界研究、テストセンター、就活マナー、面接対策、公務員・教員採用試験対策など、各種講座を開催しますので、ぜひ参加してください。

就職・キャリアに関することなら何でも相談してください。

(就職指導課・キャリア支援センター)



**平成27年度日本大学特待生・日本大学
短期大学部(船橋校舎) 萌葱賞**

平成27年度日本大学特待生および日本大学短期大学部(船橋校舎)萌葱賞の授与式が、各校舎で行われました(駿河台校舎：6月22日(月)、船橋校舎：6月25日(木))。

特待生として、理工学部は甲種8名、乙種42名、また短期大学部(船橋校舎)は甲種1名、乙種2名の合計53名に授与されました。

また萌葱賞は、建築・生活デザイン学科3名、ものづくり・サイエンス総合学科2名、生命・物質化学科1名の合計6名に授与されました。

(教務課)

第59回理工学部学術講演会



12月5日(土)
駿河台校舎1号館において、第59回理工学部学術講演会を開催します。

理工学部学術講演会は、理工学部の学術、技術ならびに教育振興のため、教職員は普段の研究・教育等の発表の場として、大学院および学部の学生等には日ごろの学習成果を発表する場として活用されています。発表は、口頭発表・ポスター発表の2形式によって行われます。

詳細については、理工学部ホームページ「学術講演会」のバナーにアクセスして確認してください。プログラムは、11月下旬にWEB上に公開する予定です。

研究事務課ホームページ

<http://www.kenjm.cst.nihon-u.ac.jp/>

お問い合わせ

skenkyu@adm.cst.nihon-u.ac.jp

(研究事務課)

第28回理工学部図書館公開講座

開催日時：2015年12月3日(木)

18:00～20:00(受付17:30～)

開催場所：日本大学理工学部駿河台校舎

1号館6階CSTホール

講演題目：風災害～風の脅威から身を守る～

講演者：日本大学理工学部 教授 野村卓史

対象：一般の方および本学学生・教職員

(先着100名)

参加には事前申し込みが必要です。はがき、FAX、またはE-mailにて、「公開講座希望」と明記し、本人氏名・所属・住所、電話番号を記入の上、講演当日までに下記へ申し込んでください。講演の詳細については、図書館事務課のホームページから図書館公開講座のページへアクセスしてください。

日本大学理工学部図書館(駿河台)

〒101-8308 千代田区神田駿河台1-8-14

FAX：03-3293-7458

E-mail：stosyo@adm.cst.nihon-u.ac.jp

図書館事務課ホームページ

<http://www.lib.cst.nihon-u.ac.jp/>

(図書館事務課)

**announcement
事務局からの
お知らせ**



学部祭 11月1日(日)～3日(火・祝)

第1回桜理祭(船橋キャンパス)

「～NEXT COLOR～」

今回桜理祭では、大学近隣の皆様をはじめ、本学学生や教職員等、数多くの人々が関わりを持ち、人それぞれのカラーを出し合える場の一つと考え、学年や学科の枠を超えさまざまな学生がおり、いろいろな人たちと関わる事ができることから、それぞれのカラーを持って行動し、桜理祭を通じて、個性あふれる人間形成ができるようお願いを込めました。

また、理工学部の学部祭一本化により、新たな学部祭を築き上げていく第一歩という想いを、「次へ」という意味のNEXTに込め、テーマを決定しました。 /桜理祭実行委員会

プログラム：研究室公開、研究室・学生団体による展示および模擬店、講演会、芸能人トークショー、子ども向け化学実験室、ビンゴ大会など

※同日開催

11/1(日) 「船橋キャンパスウッチング」

11/1(日) 「理工学部英語弁論大会」「理工学部留学生のための日本語弁論大会」

11/3(火・祝) 「短大オープンカレッジ ものづくり&サイエンス・スクール」

(学生課)

駿河台 7/12 SUN. 駿河台
入試フォーラム



8/1 SAT. -2 SUN. 船橋
オープンキャンパス



7/26 SUN. 駿河台
一日体験
化学教室



小学生のための

夏休み
「自由研究」教室



8/8 SAT. 駿河台



桜理祭マスコットキャラクター“ふーぷく”です。

全国学園祭マスコット総選挙に参戦中！

“ふーぷく”への投票（11/30まで毎日1票投票可能）よろしくおねがいします！！



6大学野球やラグビー早慶戦のようにライバル校を打倒すべく、在学生・卒業生がみんなで応援し一致団結して盛り上がっている大学があります。しかしわが日本大学にはそんなライバル校が見あたらず、「因縁の対決！」といった盛り上がり欠けるようです。実は今、熱い戦いが繰り広げられています。全国学園祭マスコット総選挙です。理工学部の学部祭「桜理祭」のマスコットキャラクター“ふーぷく”が、昨年度苦杯をなめさせられた強豪ライバルを打倒すべく戦っています。桜理祭 Twitter や理工 Facebook でも応援を呼びかけています。応援ネットワークを広げ、一致団結して“ふーぷく”をみんなの力で優勝させようではありませんか！（轟）

Circular

VOL. 45
2015. FALL
No. 166

発行
日本大学理工学部広報委員会

広報委員長・編集長
轟 朝幸

編集委員会

藤井紫麻見	高橋 亮輔	Ruth Vanbaelen	関 文夫	伊東 英幸	佐藤 光彦
重枝 豊	恵藤 浩朗	岡田 智秀	鈴木 康方	齊藤 健	佐々 修一
岩田 展幸	木原 雅巳	谷川 実	浅井 朋彦	保谷 哲也	長峰 康雄
杉山 岳寛	齊藤 春美	石井 利久	小寺 貴久	小池 文夫	塚田 淳
					鈴木 智子

編集協力

株式会社ムードッグ（長谷川 香 細田 明子 熊木美千代）

15103021000